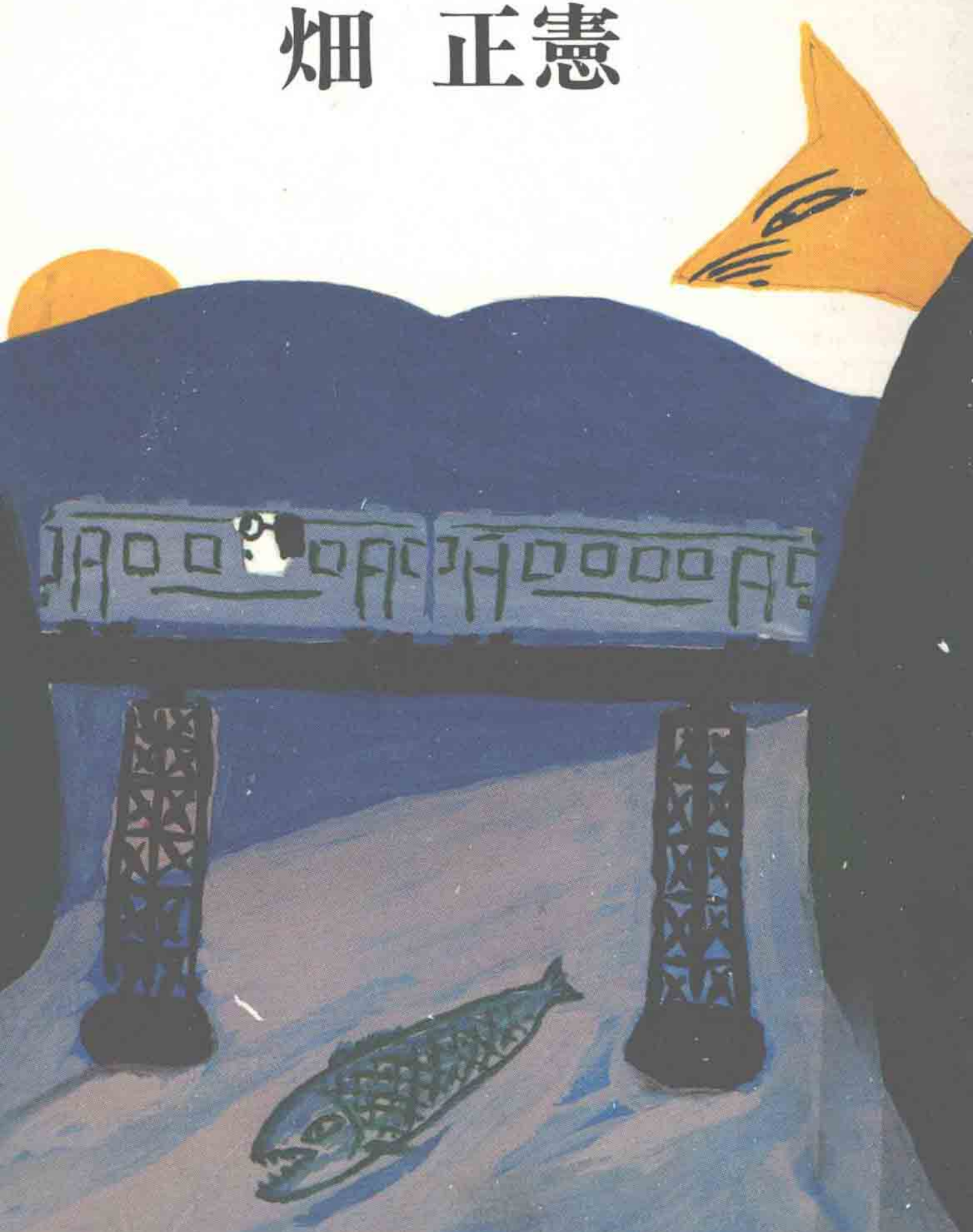
ムツゴロウの放浪記

畑　正憲



文春文庫

文春文庫　108—22

ムツゴロウの放浪記

定価はカバーに
表示してあります

1984年1月25日　第1刷
1985年1月25日　第2刷

著　者　畑　正憲
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-710822-4

ムツゴロウの放浪記

ムツゴロウの放浪記　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新しい年　9
作家修業　26
アルバイト　47
有閑マダム　64
束の間の自由　81
天才さん　95
暑く長い夏　113
あの日あの時　123

生と死と　138
揺れ動く日々　151
学者廃業　164
挫折の余波　179
春の火事　194
夫婦プロ　207
玩具の時代　220
狂気の夏　235

またまた東京で　249
惨敗の記　264
雨のわかれ　277
東京さようなら　292
小さな町で　305
復活　319
脱出　333

ムツゴロウの放浪記

新しい年

暮れにざっと水洗いしてバスケットにほうりこんで置いたシャーレやコルベンの類を取出し、中性洗剤をふりかけ、丁寧に洗って、新聞紙にくるんで滅菌器の中に入れたら、植田助教授がのれんを割って顔を出した。

「おう、やっとるな」

右手には弁当をさげていた。

生理学教室には、教授を筆頭に助手、研究生まで、正午には大部屋に集まり、談笑しつつ弁当を食べる習慣があった。それは先々代の教授が、チームワークをよりよくするためにこしらえたものだという。植田さんは、その昼食会の帰りだった。

私は照れ笑いを浮かべて、

「今年から頑張りますから」

その日、二度目の約束をした。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「うん。そうしてくれ給え」
植田さんは笑顔で応えてくれたけれど、目は笑ってはいなかった。ぼやぼやするなと、私をきつく叱っていた。
私が属している生理学教室の竹上教授は、前の年の春から、イギリスに滞在していた。ケンブリッジ大学で、グレイという生理学者と動物の行動を研究するためだった。それで助教授の植田さんが、私たちの監督を代行していた。
大学院の学生としての最初の期間、四月から十二月までの九カ月、私はあまりいい研究者ではなかった。動物を熱心に突つきはしたが、純子と新しい生活を始める方へ力をとられ、十日とか二十日の単位で、研究を中断することが多かった。
「今年はちゃんとやらねば、学位がとれなくなるよ」
その朝、私は植田さんに叱られたばかりだった。
私は頭を掻きながらつけくわえた。
「新しい培養が軌道にのったら、体積変化の追跡を開始しますから」
「うん」
植田さんは、私の三角部屋をじろりと眺めまわしてのれんの向こうに消えた。
その頃私は、皆が三角部屋と呼んでいる暗いじめじめしたコーナーで仕事をしていた。
父へのたよりなどには、
「研究室として個室を貰っています」
などと書き送ってはいたけれど、それは部屋と呼べる代物ではなく、建物を建てる際何かの

間違いで出来た薄暗い空間を薬品棚で仕切ったものだった。私が住むまでは、役立たずの古い器具をほうりこんだり、世界各地から蒐(あつ)めたあやしげな薬品をしまっておく倉庫であった。

実際その薬品棚には、ヘンテコなものがたくさんあった。すでにラベルのインクが変色した、〝ニューギニア原住民が矢の先端に使用せる毒物〟などという瓶があるのだ。多分、神経を麻痺させる薬物を研究していた先輩が、苦労して入手したものだろう。

三角部屋には不吉な雰囲気があった。聞くところによると、この部屋の住人は私が初めてではなく、以前に一人、矢張り研究生用の大部屋にあきがなく、天才肌の研究者がいたそうだ。けれども彼は、次第に他人と言葉をかわさなくなり、ついには発狂して死んだという。

他の研究室へ進んだ友人たちは、しばしば私をからかった。

「お前、のろわれた部屋にとじこもっていると、そのうちこうなるぞ」

目を裏返して白くし、両手を胸の前でだらりと下げた。

私はその不吉な雰囲気をいくらかでも和(やわ)らげようと、入口にのれんを下げていたのである。と、今度は、そののれんが不評だった。

「あれじゃ研究室ではない。飲み屋だ」

不吉な感じを、私はあまり好きではなかったけれど、一人で閉じこもれるところは気に入っていた。アルバイトの原稿を書いていても、ここなら目立たなくて済むからである。

植田助教授が去ると、私は滅菌器のタイマーを一時間後に消えるようにセットした。

「よし、おしまいだ」

手をぱんぱんと叩いた。
滅菌したシャーレに培養液を入れ、ストックカルチャーから釣りあげたアメーバを入れるのは翌日の仕事だ。
私はコンクリートの実験台の前に坐った。
ノートを開く。
――昭和三十四年一月十二日　月曜日
まず日づけを書いて、
――岸内閣改造の日、実験スタート。器具の洗滌、滅菌。
それだけ記して立上がり、白い実験衣を脱いだ。
腕時計はちょうど一時。
その日私は、正午に池袋でおち合おうと、純子と約束をしていた。だから弁当を持ってきていなかったのである。腕時計を見た途端腹が減って、腸がぐうと音をたてて鳴った。
実を言えば私は、その日、仕事を始める気は毛頭なかった。学校が始まる日だったから、ちょっと顔を出して挨拶だけし、ふけてしまうはずだった。ところが赤門を入ったところで植田助教授に遇い、前の年の怠慢を責められたので引っこみがつかなくなり、実験の準備を始めたのだった。
私はガスの栓をしめて火を消した。滅菌器のタイマーをもう一度確認し、煙草をポケットに入れて部屋を出た。
暗い階段を一気に駆け下りた。正面玄関の重いドアを肩で開ける。

あいつ、怒ってるだろうなとふと思った。
年が変わって、純子は失業保険の申請をした。その第一回の支給を受ける日なのである。彼女は金を貰うのを愉しみにしていて、
「保険を貰ったらおごるから」
と、何日も前から言っていた。腹をすかせ、待ちくたびれ、それでなくても大きなほっぺたを、特大級にふくらしているのではないだろうか。
私はポケットに手を入れ、前かがみになって足早に歩いた。妙なもので、そんな時に限って邪魔が入るものだ。校門を出たところで後ろから肩を叩かれ、私は前につんのめりそうになって、危うく踏みとどまった。
振返ると松崎だった。
「おいおい」
追いかけてきたとみえ、松崎は肩で息をしていた。
「やあ」
「やあもないもんだよ。どんなに名を呼んでも知らんふりをしているんだもの、人違いだと思ったぞ」
「呼んだのか？」
「あれ、とぼけてやがらあ」
「聞こえなかったなあ」
「まあいい。どうしてる？」

松崎が横に並んだ。

彼は私より頭一つ大きかった。顔の色は学究らしい白さで、眉が濃かった。

松崎は教養学部時代の友人である。同人誌を出そうという企みがあり、彼はそのキャップ格だった。

同人誌を出す計画は、何度も集まって練りに練ったが、結局、原稿が集まらずに立消えになっていた。製本する予算の方は、松崎がすべて持つといういい話だっただけに、もったいない話だった。

松崎は言ったものだ。

「いいんだ。おやじに出させれば。おれんちのおやじは、名古屋で大きなキャバレーをたくさん持ってんだよ。どうせくだらない奴から掻き集めたあぶく銭だから、どう使ってもいいんだよ」

横目でちらっと見ると、何年か会わぬうちに松崎はたいそう大人びていた。仕立ておろしの背広をりゅうと着こなし、品のいい無地のネクタイをしめている。

私は松崎を見上げるようにして、

「これから池袋なんだ」

「急いでいるようだな」

「正午に会って昼飯を食う約束なんだけど、実験始めちゃったら手が抜けなくてね」

「ようし、付き合おう。おれは渋谷まで行くところだけど、池袋をまわろう。地下鉄だろう？」

「ああ」
私は頷(うなず)いて、皺だらけの背広のポケットを慌(あわ)ててまさぐった。右のポケットの前寄りに金属片が一つだけあった。
――あった！
それでほっとした。その五十円硬貨一つが、私の全財産だったのである。でも、五十円あれば地下鉄に乗れる。
私たちは本郷三丁目まで歩いた。
地下への階段を降りながら、松崎が訊いた。
「『新潮』、読んだか」
「……」
「二月号だよ」
「いや」
私は口の中であいまいに否定した。純文学の雑誌は、ずい分前に読まなくなっていた。
ホームに並んで電車の到着を待ちながら、また松崎が訊いた。
「お前、フトオアゲハ知ってるか」
「フトオアゲハ……」
私はまた首をひねった。
「北杜夫という新人が『新潮』の二月号に『谿間にて』という作品を発表しているんだ。これがちょっとしたものでね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com